原著論文

スポーツにおける身体の存在様態に関する一考察¹

高 松 昌 宏 (金沢大学)²

Abstract

The purpose of this study is to discuss whether the human moving body, which is the medium of expression in sport, is retreated behind the expressed meanings and describe the mode of existence of the body through comparison with the mediums of language and art.

In ordinary language, it is pointed out that the sounds, which are the mediums of expression, are retreated behind the expressed meanings. The reason why this retreat occurs is that the sounds function as tools and accomplish expression of meanings indirectly since the combination of meanings and sounds is arbitrary.

In art, it is not possible to divide the combination of the meanings and mediums of expression, and a finished work becomes a direct expression of the meanings. The mediums constitute a work of art as the essential constitutive elements. Therefore the mediums which hold the meanings show sensuous characteristic of their existence since the mediums do not function as tools to express the meanings indirectly.

The meanings which expressed in sport can be recognized in the framework of purposive sports and aesthetic sports. The meanings found in purposive sports are expressed regardless of the intention of the performer. So it is considered that the human moving body appears as a direct expression of the meanings and shows sensuous characteristic of its existence. Intentional expression can be found in aesthetic sports. The meanings are not given to the human moving body arbitrarily and the body does not function as a tool to express the meanings indirectly. Therefore it is considered that the body appears as a direct expression of the meanings and shows sensuous characteristic of its existence. However, unlike art, it cannot be said that the meanings expressed in sport are tightly combined with the human moving body as the medium.

As the result of this discussion, it is suggested that the human moving body in sport is not retreated behind the expressed meanings and shows sensuous characteristic of its existence. In order to prove this characteristic, physical synchronizations which arise on sports spectators' bodies can be pointed out. Appearance of practical behavior of a spectator to synchronize with movement of a performer means that the human moving body is provided

¹ A Study on the Mode of Existence of the Body in Sport

² Masahiro TAKAMATSU, Health Service Center, General Education Hall, Kanazawa University, Kakumamachi, Kanazawa, Ishikawa 920-1192, Japan.

with the existence, and shows sensuous characteristic of its existence.

As the conclusion of this study, it is described that the human moving body is not retreated behind the expressed meanings and shows sensuous characteristic of its existence. It is also pointed out that the meanings expressed in sport are not tightly combined with the human moving body.

Key Words : the medium of expression, the human moving body, physical synchronization

キーワード：表現媒体，運動する身体，身体の同調

1. 緒言

わたしたちはスポーツ観戦するとき、勝敗の行方に関心をもちつつも、敵味方にかかわらず選手たちの動きに魅了されることがある。陸上競技で競い合ってトラックを疾走する姿、サッカーで絶妙のパスからシュートにいたる展開、またバスケットボールでの豪快なダンクシュートなどを目の当たりにして気分が高揚したりするのである。このとき多彩な運動形態で現出する感性的な存在である身体が媒体となって何らかの意味が表現^{注1)}され、それをわたしたちが感受していると把握でき、このような構造がスポーツの文化的存在の根拠の一つとして指摘されている¹⁾。この枠組みからみると、たとえば食であれば、食欲を満たすためだけの目的で食物を摂取することは文化としては認識されない。食材の選択から始まり、調理した素材の分量や色合い、配置などを考慮し、より見栄えがする器や皿に盛り付けることによって、食欲をそそるとともに季節感や地域特性などが表現されるような場合に、食文化として認識されるのである。このとき食材やそれを盛り付ける器などの感性的な素材が媒体となって、意味が表れているのである。ただし、ここでいう「意味」は必ずしも言語化できるものであるとは限らない。竹田が指摘するように、「たしかに人間の意味の世界は『言語』によって編まれている。

しかしわれわれは生の経験の中でつねに、決して言葉によって表現できない(前言述的な)豊かな『意味』の世界が存在することを知っている²⁾のである。言語において音声が多様な音程やリズムで現出し、芸術において色彩や形象が多彩に用いられているように、スポーツにおいては身体が多様な運動形態として現れ、これらの感性的な存在それぞれが意味の表現媒体として機能しているのである。

ところで、カッシーラー³⁾は言語における表現媒体である音声の存在様態について、次のように述べている。

物理的な音は、それ自体としては高低や強度、音色などによってしか区別されないが、これが言語音声に形成されると、それによって限定され、きわめて微妙な思想的・感情的な差異を表現するものとなる。直接的なかたちでの音は、それが間接的に遂行し、「意味する」ものの前で、完全に背後に退いてしまうわけである。

西田も表現媒体の存在様態について、「表現作用に於ては、所謂實在的と考へられるものが非實在的なもの、即ち意味といふ如きものの中に包まれる、實在的なものが意味顕現の材料となるのである⁴⁾」(傍点筆者)と述べている。ここには新田が、「媒体は機能するかぎり、

透明性を有する」⁵⁾という特性を見出すことができる。このような特性は記号的関係においてみられ、浜田⁶⁾によって次のように説明されている。

たとえば、ままごとで砂がご飯になるとき、「砂」はその実体としての砂という性質を無にしなければなりません。つまり「砂」がいわば実体としては虚のものとなったときはじめて、それは〈意味するもの〉として「ご飯」という〈意味されるもの〉につながるのです。

ここでスポーツにおける意味の表現媒体である運動する身体も、言語における音声と同様に意味の背後に退いてしまうのかという疑問が立ち現れる。そこで本稿においてはスポーツにおける運動する身体が存在様態を明示することが目的とされる。具体的には、運動する身体が言語音声のように表現される意味の背後に退くか否かを検討し、退かないのであればその存在が如何なる様態にあるのかを明らかにすることが目指される。スポーツにおける表現媒体と他の文化形式のそれとの存在様態の差異が示されるならば、それはスポーツ文化の独自性の一端を顕現化することにつながるであろう。

この目的遂行のために採られる手順は次のようである。まず、言語における表現媒体の存在様態が示され、そのような様態で存在し得る原因を芸術における表現媒体と対比しつつ考察する。次にスポーツにおける表現媒体である運動する身体が存在様態の解明に進むのであるが、考察の枠組みとして意図的な表現と意図的でない表現とを区分したうえで、両契機各々における身体が存在様態の提示がなされる。さらに最終的に、ここまでの段階で導かれたスポーツにおける身体が存在様態の把握が、実際の現象としての行動の発現によって実証されることとなる。

2. 意味と表現媒体

2-1. 言語における意味とその表現媒体の存在様態

言語の場合、日常会話で用いられる言語と作品としての言語とを区別することができる。ランガーが指摘するように、「私たちは言語の詩的用法と、通常の述言の場合の用法とは、その意味をはっきり区別して考える」⁷⁾のである。日常会話で用いられる言語表現の場合、おもに発話者の意志、意図などの対人的な伝達をさしている。しかし、言語が文学作品などの形をとると、その「表現」の意味が異ってくる。竹田⁸⁾は日常言語と文学や詩的表現との相違について、次のように指摘している。

たとえば、文学表現では、読み手は作品からその作者が「言わんとする意」を志向するわけではなく、それを仮構された独立した「表現的営為」と見なします。それが芸術表現の暗黙のルールだからです。つまり読み手が志向するのは、特定の意図、心意、概念としての「意味」ではなく、作品を媒介として表現されるいわば「表現の意味」です。ふつうの日常言語が「表現」するのは、発話者が対人的に投げかける意志、意図、願望、命令、思惑、疑問、説明等々の実践的企投（投げかけ）です。しかし読み手が仮構された物語、寓話、詩的表現などから受け取ろうとするのは、そのような対人的企投の意志ではなく、表現行為を通して創出される作者の人間理解や世界理解、またその感受性、美意識、倫理性についての表現性です。このような「表現の意味」は、一般的な言語の「表意的意味」（これは命令、指摘、説明、勧誘等々の企投的カテゴリーと、名辞的指示性を含みます）とは違ったものであることは明らかです。

日常会話での「表意的意味」の表現では、そ

の目的が達成されるとき、媒体としての音声は意味を伝達する道具として機能している。たとえば、話をしていた友人が、「さて、そろそろ食事に行きましょう」というとき、私は、「もう昼食の時間になったので、一緒に行こうと誘われている」という意味をその発話から受け取る。このとき友人の発話から「食事に行こう」という表意的意味が表現され、私はその意味を理解するが、通常はそれと同時に私の意識がその意味を運ぶ相手の声の強弱や音程、リズムなどの物理的特性には向かうことはない。つまり、発話された音声は意味の背後に退き、いわば透明性を有する存在様態となるのである。これは日曜大工で釘を打つとき、ハンマーが道具として機能する限り、その存在が透明性を有することと同様である。湯浅がいうように、「私が使用中のハンマーに注意を払わなければ払わないほど、その道具性は純粹になる。そしてそのとき、それはその便利さと信頼度の高さゆえに私の知覚から消え去るのである」⁹⁾。

身体の動きで日常言語のような「表意的意味」の表現を目的とする手話を考えてみよう。手話で意味伝達がスムーズに行われているとき、手を中心とする身体の動きは日常言語における音声と同様に意味を伝える道具としての機能を果たしている。その結果、動く手は表現される意味の背後に退くといえよう。この場合には新田によって、「機能が働くかぎり機能は自己を隠すのである」¹⁰⁾と指摘される特性が見出される。手話では手の動きが意味伝達の媒体として機能するとき、その動く手は透明性を有し、自己を隠すのである。しかしながら、意味がうまく伝わらないとき、受け手は伝え手の動きの形や構成により強く意識を向けざるを得なくなる。伝え手が手話に不慣れであったり、受け手の語彙が少ないときには、伝え手の動きは受け手にとって表現されるべき意味の前に障害として立ちはだかるのである。このとき動く手は透明性を有することなく、意味の読み取れない動きをする手として感性的な性質のまま顕在化し

ていると考えられる。

日常言語でも不慣れな外国語の会話では、個々の単語の意味の把握に強く意識を向ける必要があり、初めて聞き、前後の文脈からも理解しづらい単語に出会うことも珍しくない。このようなとき、その単語は物理的な音としての性質のまま聞き手の前に立ちはだかることとなり、使い慣れた母国語での会話のように音声表現される意味の背後に退いて透明性を有するという状況にはならないのである。つまり日常言語であっても、意味がうまく聞き手に伝わらず、道具として機能しない場合には、その媒体である音声は感性的な性質のまま顕在化していると考えられよう。また、手の動きという身体の運動であっても、「表意的意味」の表現が目的とされ、それが達成されるときには、媒体である運動する身体は道具性を帯び、意味の背後に退くことになるのである。

2-2. 意味と表現媒体の関係性

では、なぜ日常言語において音声の意味の背後に退くという現象が生じ得るのであろうか。この理由は、西田¹¹⁾が次のように述べる言語と芸術との相違によって示唆されている。

言語に於ては、意味と言語との間には、内面的統一がない、言語は単なる符号と考へられるのである。物が意味を表現すると云ふ時、表現せられる意味と、表現する物と、この両者を結合する作用とが考へられるであらう。言語の如きも、既に客観的精神の所作として、単なる意識的我的行為とは云はれないが、意味と言語との間に直接の結合を見得ざる限り、別に之を結合する作用を考へざるを得ないであらう。之に反し、芸術に於ては、表現せられる内容其者の中に、作用が含まれて居るといふことができる、意味其者が働く、意味が実在を含むと云ふことができる。画や塑像は言語と異なつて意味其者の直接の表現である。無論、それは芸術家によつて作

為せられたものと云ひ得るであらう。

さらに西田¹²⁾は次のようにいう。

言語に於ては、意味と言語との結合が偶然的なるが故に、表現作用として不完全と考へられるが、一方に於ては却つて意味其者の超越性を見ることができる。思惟の自由性を見ることができるのである。之に反し芸術に於ては、意味と表現との結合が内面的なるが故に、主観が客観の中に没し、客観に制約せられるとすら考へられるのである。

意味と言語との結合が偶然的であるとの指摘は、ソシュールが述べる言語記号のもつ恣意性¹³⁾に対応している。小浜¹⁴⁾が説明するように、たとえば「いぬ」の概念像（シニフィエ）が、「イ・ヌ」という発音そのもの（シニフィアン）に結合することは恣意的、すなわち自然に対して反自然的であるという意味で人為的なのである。言語ではその意味との結びつきが偶然的かつ恣意的であるがゆえに、音声が無意識的に結びついている意味の表現を、カッシーラー¹⁵⁾が指摘するように間接的に遂行することになる。その結果、媒体である音声の道具性が純粋となり、音声は意味の背後に退き、いわば透明性を有する存在様態となるのである。媒体としての音声とそれが運ぶ意味とが乖離し得るともいえよう。

一方、絵画において用いられる色彩や諸形象などの表現媒体は、作者が芸術的構想を完成するためには他のものでは代替できない。渡辺は芸術を感覚の対象のうちに精神的なものが内在するという意味で内在的象徴であると捉え、「芸術作品の場合、その象徴作用は非常に複雑であり、多様であり、また緻密であってひとつの線、ひとつの色でも変更できない重要さをになっている」¹⁶⁾と指摘している。すなわち芸術における表現媒体は、多様であっても各々がそれ以外のものでは代替できない存在であり、表

現される意味と媒体とは分離しがたく結合し、作者によって付与された意味を担って作品の本質的な契機となっているのである。そのため芸術における媒体は日常言語の音声のように意味を間接的に表現する道具としてではなく、西田がいう意味其者の直接の表現¹⁷⁾である作品の構成契機として存在し、意味の背後に退くことなく、意味を担ったまま作品とともに感性的性質を帯びて顕在化していると考えられよう。絵画では一つ一つの線や色が作者の意図する意味を担って作品を構成し、「制作が終了して作品が完成したとき、それは表現された内容となる」¹⁸⁾のであり、作品と意味とは切り離すことができないのである。ランガーによって知覚し得る表現形式の創作が、芸術の原理として把握され¹⁹⁾、「芸術的形式は、目に見え、耳に聞こえ、または想像されるものの知覚的統一体であり、ある経験の形態、つまりゲシュタルト（形態）である」²⁰⁾と述べられるように、芸術は感性的な形式として創出されているのである。

では、スポーツにおいて見出される意味とその表現媒体との関係はどのように捉えられるのか。スポーツにおいては運動する身体が媒体となって、日常言語のように命令、指摘、説明、勧誘等々の企投的カテゴリーや名辭的指示性の表現が目指されるわけではない。スポーツではこのような「表意的意味」の表現が目的とされず、日常言語や手話とは異なり、表現媒体に意味が恣意的に結合されていないといえよう。一方、わたしたちはフィギュアスケートやシンクロナイズド・スイミングなどの種目で、演技の構想に基づいて選択された音楽とともに展開される運動主体の動きに意図的な表現を見出すことも事実である。これは芸術にみられるような「表現的意味」の表現として把握できるのであろうか。しかし、野球やサッカーそして陸上競技などの種目では、このような表現はみられないであろう。そこでスポーツにおける意味とその表現媒体との関係の考察に先立って、ペスト²¹⁾による目的的スポーツと美的スポーツと

いう枠組みから、スポーツにおける表現の契機を明らかにしておくことが必要であろう。

2-3. スポーツにおける表現の契機

目的적スポーツにおける勝敗は、たとえば陸上のトラック競技では競争相手よりも早くゴールに入ること、サッカーや野球では試合終了時に相手よりも多くの得点をしていることなど、ゲーム終了時の結果によって判断され、ルールによる規制の範囲内であれば、その結果にいたる経過が評価の対象にはならない。目的적スポーツに該当する種目では、ゲームの最中に選手の運動する身体によって何らかの意味が意図的に表現されることはない。プレイヤーは得点に結びつけることを考えてサッカーのパスやバスケットボールのシュートを遂行するが、それらの動きで何らかの意味を表現しようとは考えないのである。ただし、ゲームのなかで選手たちの喜怒哀楽等の感情の表現が散見されるのも事実である。これらは得点の瞬間の歓喜や相手の反則に対する怒りなどがきっかけとなって思わず表れ出る内容であり、意図的に表現されるのではない。このような表現は当該スポーツの成立にとって必要不可欠な要素ではなく、スポーツの本質的な契機とはいえないであろう。

これに対して美的スポーツ、たとえば体操競技やフィギュアスケート、シンクロナイズド・スイミングなどの種目では、演技の経過自体が評価の対象とされ、動きの優美さや躍動感などの表現も評価の対象とされる。しかしながら、これらの種目で見出される表現は芸術における表現の契機と同等には捉えられないであろう。樋口は「体操競技やフィギュアスケートにおいて、どのように演技を構成していくかというような、あたかも芸術創作と似たような要素があるとしても、そこには実践者の感情を表現していく芸術的構想などはありはしない。彼らのめざすのは、個々の技をより完璧に遂行し、演技全体としてもより高い得点が与えられるようなパフォーマンスを提示することだけである」²²⁾

と指摘している。また、ベストも「スポーツの競技者は、いろいろな規制の中で、人生の問題についての見解を表現することなどはできないのであり、そのような可能性はいかなるスポーツ、たとえ美的な種類のスポーツにとっても本質的なものではないのである。たとえば、戦争や人種差別に対する態度を表現する規定演技を行う体操競技選手を思い浮かべることなど困難である」²³⁾と述べている。これらから美的スポーツであっても、芸術にみられるような構想や主題を欠いているとみるのが妥当であり、樋口²⁴⁾が指摘するように、芸術のような意図的な表現は本質的にありえない²⁵⁾といえよう。美的スポーツにおいては優美さや躍動感などが表れ出る動きが意図的に遂行されはするが、それは当該種目のルールの規制のもとでパフォーマンスの一要素として提示されるのであり、芸術における表現とは異なり、主題とはならないのである。

では、スポーツにおいて見出される意味と、その表現媒体である運動する身体との関係はどのように把握できるのであろうか。この関係性の明確化が運動する身体が存在様態の解明につながるであろう。

2-4. スポーツにおける意味とその表現媒体

目的적スポーツでは意図的な表現の契機は認められず、樋口²⁵⁾が指摘するように生命力や人格性といった生が表出されるだけであるといえよう。このように表れ出る意味は日常言語における意味とは異なり、運動する身体に恣意的に付与されるわけではない。陸上競技で疾走する姿やバスケットボールでのダンクシュートから表れ出る躍動感や力動感は、運動主体の意図とは無関係に、運動する身体の出たとともに自然に表れるのである。運動する身体が意味を間接的に表現するのではなく、いわば直接の表現となっているともいえよう。このとき躍動的な走りやダイナミックなシュートが顕現化されるだけであり、選手たちはその走りやシュートの

動きを媒体として躍動感や力動感などを表現しようとは意図しないのである。そのため運動する身体は意味を表現するための道具性を帯びることなく、表れ出る意味を担ったまま感性的に存在していると考えられよう。

フィギュアスケートやシンクロナイズド・スイミングなどの美的スポーツでは、演技での豊かな表現を目指して、指先の動きにいたるまで緻密に配慮され、十分な練習とリハーサルを経た後に発表される。優美さや躍動感を表現するとき、それらの意味そのものが表れ出る動き、いわばその運動の質として優美さや躍動感が備わっている動きが提示されるのである。このとき運動する身体は日常言語の音声のように意味を間接的に表現する道具性を帯びず、意味そのものの直接の表現となっているといえよう。たとえば、ゆったりとした手の動きで表現される「ゆったり」感はその動きの質としてあり、その動き自体が「ゆったり」感の表現であり、「ゆったり」という意味がその動きに恣意的に付与された後に表現されるわけではない。手話とは異なり、身体の動きにある特定の意味が恣意的に付与されてはいないのである。すなわち、美的スポーツにおいて運動する身体は意味を帯びて感性的な性質のまま存在していると考えられよう。

ただし、美的スポーツでは順位争いの駆け引きやプレイヤーの体調などを理由に、演技内容が発表の直前や演技の最中に変更されるという事態がしばしば生じる。フィギュアスケートの演技で三回転ジャンプの予定が二回転に急遽変更されたりするのも稀ではない。美的スポーツにおいて目指され、実践される演技内容は芸術作品の媒体のように唯一無二のものではなく、その構成に選択の余地が存在するのである。これは美的スポーツの演技では意味とその表現媒体である運動する身体が、芸術作品における意味と表現媒体との関係のように分離しがたく結合していないことを示している。即興でない限り、芸術的構想に基づいた舞踊の構成が発表直

前や発表の最中に変更されることは考えにくいであろう。このような状況の現出は、美的スポーツにおいては表現が主題とはされず、審査員から他者の演技よりも高い評価を得ることが重視されることに起因している。そのために表現も必要な要素ではあるが、状況に応じて最も高い評価が得られる技が選択されたり、失敗の可能性が低くなおかつ確実に評価される技が提示されたりするのである。フィギュアスケートやシンクロナイズド・スイミングなどの演技でより良い評価を得るためには、表現のみならず、当該種目で認められた難易度の高い技の提示が必要とされるのである。力動感や躍動感が求められる体操競技であっても、金子が指摘するように「すべては体操競技という運動形式の枠の下に、現実のルールの規制のもとで、勝敗決定の有利な資料の産出をねらって行なわれざるを得ない。その限りにおいては、一定の距離を最少の時間で走り切ったり、より高いバーを跳び越すことを直接のねらいとするような、一般のスポーツ種目と本質的に同じなのである」²⁶⁾といえよう。

以上のように、スポーツでは目的のスポーツと美的スポーツという区分にかかわらず、表現媒体である運動する身体には意味が恣意的に付与されず、間接的に意味を表現する道具性を帯びないことから、運動する身体は意味の背後には退かず、感性的な性質のまま顕在化している可能性が示唆された。

では、この可能性は何らかの方法で検証することができるのであろうか。ある対象が感性的に存在しているということは、視覚、聴覚、触覚など感覚器官によって把握できる様態にあることを意味し、いわば実在性を帯びていると把握できよう。浜田²⁷⁾はものの実在性について、「生体をしてそのものに向かうなんらかの実際的行動を行わしめる性質」と定義し、具体例として次のように述べている。

トゲウオが鏡に写った自分の赤い腹に向か

って攻撃行動を行なうのは、トゲウオがまさにその鏡像に、それに向かって何かを〈する〉べき実在性を見ているからにはかなりません。さらに敷衍すれば、ものの実在性とは「生体の〈する〉世界に位置づくこと」とも言えます。

ここで述べられる実在性が、運動する身体の感性的存在の可能性を検証する手がかりとなるであろう。運動する身体を観る人になんらかの実際の行動の発現を認められるならば、運動する身体が生体をしてそのものに向かう実際の行動を行なわしめる性質を保持していることを意味し、それは運動する身体の実在性、すなわち感性的な存在の証左として捉えられるからである。この実際の行動として指摘し得る現象として同調をあげることができよう。

3. 運動する身体の感性的存在の証左としての同調

私たちはスポーツ観戦するとき、選手の動きとともに思わずからだが動いてしまうことがある。ボクシングの試合を観るとき、選手の動きに同調して思わずからだが動いたりするのである。浜田²⁸⁾は、このような状況を反射的に相手の動きを同型的になぞる共鳴動作として、次のように説明している。

ボクシング観戦に熱中している人は、まずじっとしていない。自分が試合をやっているわけでもないのに、つい腕を振るう仕草が出てしまう。腕を振るうところまでやらなくても、肩が揺れ、肘が振れる微細な動きがともなっている。さらに目に見える動きのない人でも、筋電図で測定すると観戦している選手の動きに対応する反応が見られる。そういうかたちで相手の身体の動きが自分におのずとうつってしまう。

また、市川²⁹⁾は次のように述べている。

同調の問題は、言語芸術を含めたシンボリック形成物一般に拡張して考えることができる。感応的同調は、もらい泣きのように全面的に行為を共有するケースもあれば、ボクシングを見ている人が思わず手につき出す場合のように行為を部分的に共有し、やりはじめをなぞることもある。子供にはこの種の現実的同調がしばしばみられる。表面は冷静な大人も潜在的に共通の姿勢図式に同調し、特定の筋肉系の緊張をデッサンする。試合に引き込まれた観客は、見ていたにすぎないのに、試合のあとぐったりと疲れをおぼえる。

このように確認されているスポーツ観戦をする人に発現する同調の現象は、生体をしてそのものに向かう実際の行動として把握できる。つまり、同調という実際の行動を行なわしめる性質をもつ、観る対象である運動する身体に実在性を認めることができるのである。これは運動する身体が感性的な性質のまま顕在化していることを示しているといえよう。

日常言語において表現媒体である音声は道具性を帯びることによって透明性を有し、その感性的性質は表現される意味の背後に退いてしまう。このとき同調の現象は生起しない。しかし言語であっても、それが詩歌のように芸術形式として創作されるときには、媒体である音声は意味の直接の表現となり、透明性を有することなく、感性的性質を帯びたまま顕在化しているといえよう。私たちが詩を朗読するとき、音声の抑揚やリズムに配慮するのは、意味のみならず音声の感性的性質がそれを聴く人に対して顕現化することを了解しているからである。また、音楽を聴くとき思わず身体でリズムをとってしまうのも、楽音が感性的な性質のまま顕在化していることを示している。このような同調は市川³⁰⁾が指摘するように、スポーツから芸術までを含めたパフォーマンス・アーツで生じるのである。また、他の芸術作品であっても、たとえば絵画や彫塑をみるとき、感動して

その前にしばらく立ち止まってしまうのもその対象に向かう実際の行動のひとつの現れとして捉えられる。一方、身体の動きであっても手話のように、動く手が純粋な道具として機能し、表現する意味の背後に退くときには、その動きに同調することはないのである。このとき動く手は透明性を有する存在様態となっているのである。

以上から、スポーツにおける意味の表現媒体である運動する身体が、日常言語における音声とは異なり、意味の背後に退くことなく、感性的な性質のまま顕在化しているという把握は、スポーツ観戦における身体の同調という実際の行動の発現の確認によって実証され得るといえよう。

4. 結語

本稿では、文化の特性の一つとして捉えられる意味の表現媒体の存在に着目し、スポーツにおける表現媒体である運動する身体が、言語の音声のように意味の背後に退くか否か、さらに退かないとすれば、それは如何なる様態で存在するのかを明らかにすることが目的とされた。

日常言語においては、表現媒体である音声は、表現される意味の背後に退くことが指摘されている。この「退き」は、日常言語においては表意的意味の表現が目的とされ、意味と表現媒体である音声との結合が偶然的かつ恣意的であることから、音声が意味の表現を間接的に遂行し、道具として機能することに起因することが示された。

一方、芸術においては、意味と表現媒体とは分離しがたく結合しており、完成された作品は意味そのものの直接の表現として捉えられた。芸術作品を構成する色彩や諸形象などの表現媒体は意味そのものである作品の本質的な構成契機であり、表現媒体は日常言語における音声とは異なり、間接的に意味を表現をするという道具性を帯びず、意味を担って感性的な性質のまま顕在化していると把握された。つまり、芸術

における表現媒体は意味の背後に退かないのである。

これらの論議を踏まえて、スポーツにおける意味の表現媒体である運動する身体の存在様態の解明に向かって考察が進められた。スポーツにおける表現の契機は、目的적スポーツと美的スポーツという枠組みにおいて捉えられた。目的적スポーツにおいて見出される意味は、その表現媒体である運動する身体に恣意的に付与されるのではなく、運動主体の意図とは無関係に表れ出るのである。このとき運動する身体は意味の直接の表現として現出しており、日常言語の音声とは異なり、意味の背後に退くことなく感性的な性質のまま顕在化していると考えられた。美的スポーツにおいては意図的な表現が認められるが、その意味は日常言語とは異なり、表現媒体である運動する身体に恣意的に付与されず、運動する身体は意味を間接的に表現する道具としては機能していない。そのため美的スポーツにおいても運動する身体は、意味の背後に退くことなく、意味の直接の表現として感性的な性質のまま顕在化していると考えられた。ただし、美的スポーツで目指されるのは演技の高い評価を審査員から得ることであり、芸術のような表現が主題とはされない。そのため提示する動きに選択の可能性があり、演技によって表現される意味とその媒体である運動する身体は分離しがたく結合しているとはいえないのである。

以上の考察から、スポーツにおける運動する身体は、日常言語における音声とは異なり、意味の背後に退くことなく、感性的に顕在化している可能性が論じられた。このように帰結した運動する身体の感性的な顕在化の可能性を現象場面で検証し得る視点として、スポーツ観戦で生じる身体の同調が着目された。観ているプレイヤーの動きに同調するという実際の行動が生起することは、観る対象である運動する身体に実在性がそなわっていることを意味し、これは運動する身体が感性的な性質のまま存在してい

ることの証左となるのである。すなわち、スポーツ観戦での同調という実際の行動の発現の確認によって、スポーツにおける意味の表現媒体である運動する身体の感性的な存在様態の確認を得ることができたのである。これにより本研究の結論として、スポーツにおいて運動する身体は、日常言語における音声とは異なり、意味の背後に退くことなく感性的に顕在化している、と明示することができたのである。

本研究により、文化の一形式として把握されるスポーツの独自性の一つとして、その表現媒体である運動する身体の感性的な顕在化という身体が存在様態をあげることができた。これはスポーツの内的構造の特性として、言語と差異化可能な視点である。また、表現媒体が共に顕在化している芸術とスポーツとの差異化は、それぞれの媒体と表現される意味との結合の度合いに着目することによって可能であることも示された。本考察において表現媒体の存在様態に着目することによって、スポーツと言語、芸術という文化形式の各々の構造特性の一端を顕現化することができたのである。

注

- 1) 「表現」という日本語は、渡辺³¹⁾が指摘するように多義的であり、きわめて曖昧に用いられているのが現状である。そこで本稿においては、彼の規定にしたがって、「表現」は外界の事物を描写する原理的作用である「再現」(representation, Darstellung)と、内的なものを外化する原理的作用である「表出」(expression, Ausdruck)の二つの契機をもつ用語として用いられる。「表現」の意味のこのような把握は、渡辺も述べるように平凡社「哲学事典」³²⁾や弘文堂「美学事典」³³⁾にもみられる。また、木村³⁴⁾も「表現運動」(広義の Ausdrucksbewegung)という用語を、「表出運動」(狭義の Ausdrucksbewegung)と「再現運動」(Darstellungsbewegung)の両方を含む上位概念として使用している。
- 2) スポーツが芸術かどうかという問題に関する論議については、樋口が次の文献で詳細に検討しているので参照されたい。樋口 聡。(1994). 遊戯する身体。岡山市, 大学教育出版, pp. 147-171.

引用・参考文献

- 1) 高松昌宏。(2002). スポーツの文化としての存在根拠に関する一考察—感性的基体を端緒として—. 体育・スポーツ哲学研究. 24-2, pp. 27-38.
- 2) 竹田青嗣。(2004). 現象学は〈思考の原理〉である。東京都, 筑摩書房, p. 168.
- 3) カッシーラー, E. (1989). 生松敬三, 木田元訳. シンボル形式の哲学 [一] 第一巻 言語. 東京都, 岩波書店, p. 57. <Cassirer, E. (1988). Die Philosophie der Symbolischen Formen. Bd. 1. Die Sprache, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, S.27>.
- 4) 西田幾多郎。(2003). 西田幾多郎全集第三巻. 東京都, 岩波書店, p. 378.
- 5) 新田義弘。(2001). 世界と生命. 東京都, 青土社, p. 225.
- 6) 浜田寿美男。(2002). 身体から表象へ. 京都市, ミネルヴァ書房, p. 146.
- 7) ランガー, S. K. (1984). 池上保太, 矢野萬里訳. 芸術とは何か. 東京都, 岩波書店, p. 173.
- 8) 竹田. 前掲書, p. 149.
- 9) 湯浅慎一。(2000). 日常世界の現象学. 東京都, 太陽出版, p. 260.
- 10) 新田義弘。(2001). 現象学とは何か. 東京都, 講談社, p. 151.
- 11) 西田. 前掲書, p. 377.
- 12) 同上書, p. 378.
- 13) 丸山圭三郎。(1983). ソシユールの思想. 東京都, 岩波書店, pp. 143-155. および pp. 296-313.
- 14) 小浜逸郎。(2003). 「恋する身体」の人間学. 東京都, 筑摩書房, pp. 143-146.
- 15) カッシーラー. 前掲書, p. 57. <a.a.O., S.27>.
- 16) 渡辺 護。(1988). 芸術学 [改訂版]. 東京都, 東京大学出版, p. 218.
- 17) 西田. 前掲書, p. 377.
- 18) 樋口 聡。(1994). 遊戯する身体. 岡山市, 大学教育出版, p. 160.
- 19) ランガー. 前掲書, p. 140.
- 20) 同上書, p. 205.
- 21) Best, D. (1978). Philosophy and Human Movement. George Allen and Unwin, London, pp. 103-105. および Best, D. (1980). Art and Sport. Journal of Aesthetic Education. vol. 14, pp. 70-72.
- 22) 樋口 聡。(1987). スポーツの美学. 東京都, 不昧堂出版, p. 108.
- 23) Best. (1980). op.cit., p. 78.

- 24) 樋口. (1994). 前掲書, p. 161.
- 25) 樋口. (1987). 前掲書, p. 261.
- 26) 金子明友. (1977). スポーツ美学論. 体育原理研究会編. 東京都, 不昧堂出版, p. 113.
- 27) 浜田. (2002). 前掲書, p. 146.
- 28) 浜田寿美男. (1999). 「私」とは何か. 東京都, 講談社, p. 110.
- 29) 市川 浩. (2001). 中村雄二郎編. 身体論集成. 東京都, 岩波書店, p. 372.
- 30) 同上書, p. 364.
- 31) 渡辺. 前掲書, pp. 83-97.
- 32) 荒川幾男他編集. (1980). 哲学事典. 東京都, 平凡社, p. 1165.
- 33) 竹内敏雄編集. (1987). 美学事典 増補版. 東京都, 弘文堂, p. 175.
- 34) 木村真知子. (1987). 表現運動の人間学的考察. スポーツ教育学研究. 7-2, pp. 1-7.

受付 2004年 7 月15日

受理 2004年10月15日